

シルクロード天山北路の形成過程

—キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査(2022年)—

山藤 正敏 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員
バキット・アマンバエヴァ キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所部長

Formation Process of the Silk Road, Tien Shan North Way: Archaeological Survey of the Western Chuy Valley, the Kyrgyz Republic (2022)

YAMAFUJI, Masatoshi Senior Researcher, Nara National Research Institute for Cultural Properties
AMANBAEVA, Bakit Head, The Institute of History and Cultural Heritage, National Academy of Sciences, the Kyrgyz Republic

シルクロード天山北路の形成過程—キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査(2022年)—

1. はじめに：調査経緯と目的

2018年9月、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所とキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所は、5年間の期限で考古学調査に関する研究協力協定を締結した。同年、この合意に基づいて、チュー渓谷西部においてチュー渓谷考古学プロジェクト(Chuy Valley Archaeological Project: CVAP)を開始した(山藤・アマンバエヴァ 2020, 2021)。

5~6世紀にソグド商人によって成立したシルクロード天山北路が東西に貫くチュー渓谷は、交易都市の成立を解明する目的で、1940年代よりソヴィエト人考古学者により重点的な調査の対象とされてきた(Бернштам 1950; Кожемяко 1959)。近年では、東部のクラスナヤ・レーチカ(Krasnaya Rechka)やアク・ベシム(Ak-Beshim)において考古学調査が実施されている(山内・アマンバエヴァ編 2016; 城倉他 2016; 帝京大学文化財研究所・キルギス国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所編 2020 他)。

従来の調査は、拠点都市やそれに付随する城塞等を主な研究対象としたことから、当該地域の包括的な文化史の把握には必ずしも至っていない。こうした状況はチュー渓谷西部では特に顕著であり、結果として、1)天山北路の形成・発展過程、2)天山北路が開通した文化史的背景、そして3)チュー渓谷の包括的居住史、の詳細が未解明なままである。そこで本調査は、西方のソグディアナから東方にアクセスする際の入口部分にあたるチュー渓谷西部を調査対象として、まずは包括的な考古学踏査により遺跡分布状況を精細に把握することにした。以下では、2022年9月に実施した考

古学踏査の成果について報告する。

2. 調査の概要

本調査はチュー渓谷西部、キルギス共和国の首都ビシュケクから約62km西に位置するカラ・バルタ市の周辺地域(東西約35km、南北約50km)を調査対象としている(図1)。当該地域の南には天山山脈の前山であるキルギス山脈(Kyrgyz Ala-Too)がそびえるが、北には沖積平原が広がり、国境を越えて北方のカザフスタン共和国に続く。調査地域の東はアク・スウ(Ak-Suu)川及びクレポスト(Krepost)川、西は支流や現代の水路等を繋いだ任意の境界線により画され、調査地域のやや西寄り中央にはカラ・バルタ(Kara-Balta)川~ジョン・アrik(Jon-Arik)川が南から北へ貫流する。本調査では、調査対象地域を4つの区域に分割した(Zones I~IV)。

上記区分に従い、2020年度までに2回の現地調査を実施し、既知の14遺跡を含む計52遺跡(2018年度: CV18001~18021; 2019年度: CV19001~19031)を登録した(山藤・アマンバエヴァ 2020, 2021)。本年度は、2022年9月11日から9月24日まで第3次調査を実施し、新たに38遺跡を登録することができた。

3. 調査の成果

第3次調査では、調査地南西部に位置するZone IVbに注力して考古学踏査を実施した(図2)。Zone IVbは、キルギス・アラトー山脈から北の平野部に注ぐカイナル(Kainar)川の河口部分周辺にあたり、北方に広がる平野部(Zones I・II・III)とは異なり、ソ

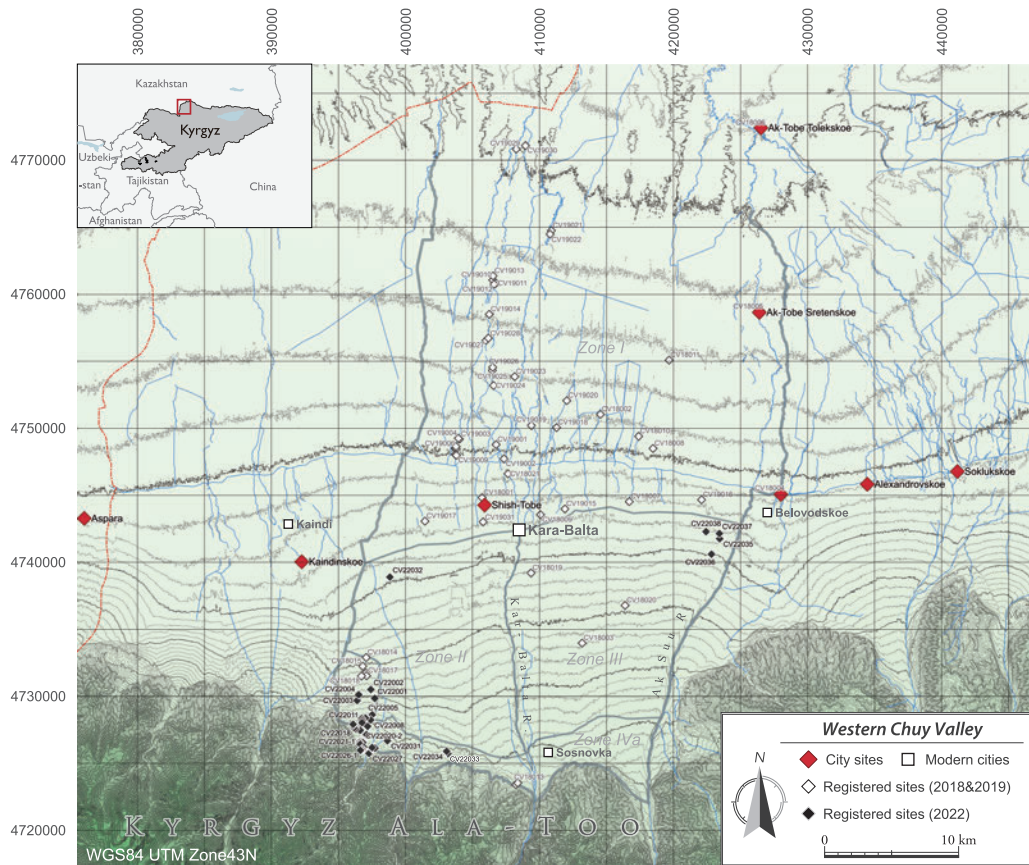


図1 登録遺跡分布図(山藤作成)

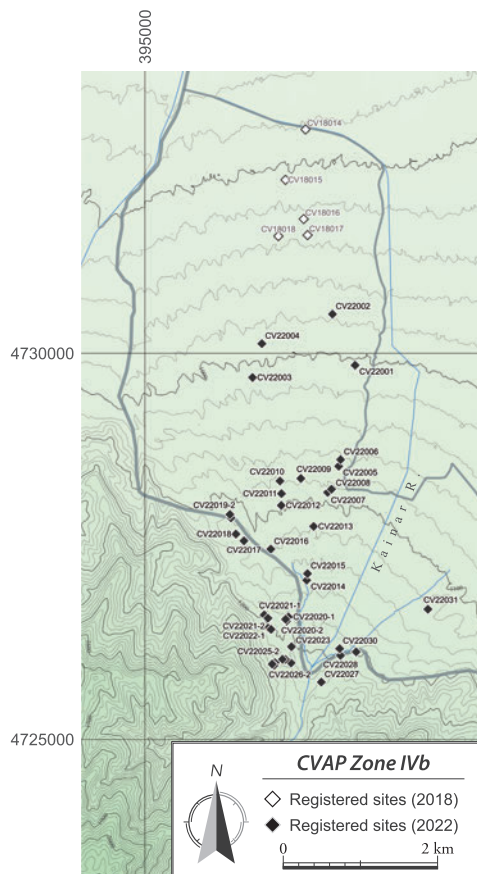


図2 Zone IVb における登録遺跡分布図(山藤作成)

ヴィエト時代の大規模な農地開拓が明らかに及んでいない。現在は、カイナル川の支流により形成された無数の小規模な河岸段丘上において農業が営まれている。このため、衛星画像上でも多くの地物が残存している状況がみてとれた。また、Zones II・III・IVaにおいて、分布することを認知していたものの未記録であったクルガンのいくつかを登録することができた。結果として計38遺跡を新たに登録し、本プロジェクト全期間での登録遺跡数は90遺跡に達した。以下では、本年度に新規確認した遺跡を類型別に概説する。

【居住地(Settlement)】

1件の町(Town: CV22007)を確認した。タシュ・マザール(Tash Mazar)の名で登録したこの遺跡は、その北辺部を無舗装道路が東西に貫いており、その北側で土器や動物骨を多量に採集できることが地元民に知られていた。今回の調査では、遺跡の範囲が東西道路の南側にも広がっていることを新たに確認した。遺跡は、北へ流れる2本の小河川間の約6ha(東西約150m、南北約340m)の範囲に広がっており、全体が北に向かって傾斜する緩斜面上に位置する(図3)。遺跡範囲には、住居跡と思われる多くの小丘が密集し、多量の土器が散布していた。遺跡の北部には大型矩形



図3 タシュ・マザール(CV22007)全景(南西上空から、山藤撮影)

の痕跡が地表面で認められ、公共的な性格を有する施設の存在をうかがわせる。本遺跡では、UAVによる全体の地形測量を実施した。

【生活遺構(Domestic remain)】

生活遺構と思しき遺跡を計20件確認した。このうち13遺跡において17基の囲い込み遺構(Enclosure)を記録した。囲い込み遺構は、溝や堤等で円形あるいは矩形に一定範囲を区画し、内部の閉鎖空間を活用した痕跡と見られる。内部空間は平坦面であり、他に遺構は一切認められない。17基のうち、12基は円形または半円形、4基は矩形、残りの1基(CV22022-1)は不定形であった。円形囲い込みのうち9基は、内側の周溝と外側の低い周堤より成る(内溝外堤：A型)。溝・堤共に幅は1.5m前後を測る。この他は、1基は内側に堤及び外側に溝(外溝内堤：B型)、1基はA・B型の混合型であった。残る1基(CV22030)は溝を伴わない珍しい型式であり、長さ50~80cmの礫による積石列により円形に縁取られていた(図4)。この積石列の一部は、高さ30cm程度の立石により構築されており、内径は約6.5mを測る。矩形の囲い込み4基は、3基がA型、1基が溝のみ(C型)から成る。また、不定形の1基はA型であった。なお、A型の円形・半円形・矩形囲い込みは、CV22026においてのみ同時に認められた(図5)。

生活遺構のうち6遺跡では単独の建物遺構が見られた。いずれも矩形を呈しており、CV22004を除き、周溝の内側に堤状に泥レンガ製壁体の基部が残っている。なお、CV22004では、矩形に掘り込まれた溝のみが認められ、溝の内側は起伏のある地表面が見られた。おそらくは何らかの遺構の痕跡であろう。いずれ



図4 CV22030 俯瞰(上が北、山藤撮影)



図5 CV22026 俯瞰(上が北、山藤撮影)

の遺構も耕作地の縁辺部に位置していることから、農耕に関連する施設の痕跡と考えられる。

上記の他、キャンプ跡とも推測される遺構(CV22020-2)を確認した。当該遺構では、北・東・南の各辺は溝と堤により区切られるが、西側にはこうした痕跡は見られない。全体形は、南北に長い長方形を呈していた。溝・堤の内側には平坦面のみが広がり、他遺構は認められなかった。

【葬祭遺構(Funerary/ritual remain)】

計20遺跡において葬祭遺構を記録した。このうち7遺跡は円形墳丘墓から成る墓域であった。墳丘墓は直径5~10mと5m未満のものに概ね区分でき、前者は5遺跡(CV22011、22017、22023、22027、22029)で、後者は2遺跡(CV22013・22031)において主体を占めていた。直径5~10mの墳丘墓から成る墓域のうち特に規模が大きかったのはCV22011及びCV22017であり、両墓域では直径7~8m程度の低墳丘が約20基認められた。直径5m未満の墳丘墓が主体を占める墓域では、CV22013の方がCV22031に比べて構成する墳丘墓がやや大きい傾向がある。なお、CV22013はタシュ・マザール(CV22007)の南西には



図6 エフィロノス・クルガン(CV22032)全景(北上空から、山藤撮影)

は隣接することから、この町に附属した墓域と見做せるだろう。

本年度の調査では、7ヶ所でクルガン群を記録した。このうち5遺跡は平野部(Zones II・III)に所在し、残る2遺跡(CV22033・22034)のみが山沿い(Zone IVa)に位置していた。Zone IIにおいて記録したエフィロノス(Efronos: CV22032)は現況で5基のクルガン(直径約35~70m)から成り、最北端のものが最大であった(図6)。Zones II・IIIにおける4遺跡では計22基のクルガンが認められ、規模は直径約23~45mであった。これらに対して、キルギス・アラトー山脈北麓沿い(Zone IVa)に所在する2遺跡(CV22033・22034)では各14基・6基が認められ、それらの規模は直径約16~32mと北方のクルガンに比べて小型であった。

上記の他、1~3基の小型墳丘墓が3遺跡において認められた。

【その他遺構(Miscellaneous feature)】

カイナル川から分岐する小河川の東岸において、堤状遺構(CV22016)を記録した。この遺構は無加工礫の乱積みにより造られており、幅約2.4m、長さ39mを測る。全体形はS字状を成すが、その半分は河川に沿って造られている。遺物は採集できていないため

時期不詳であり、機能も現段階では判然としない。

4. おわりに

本年度に実施した第3次調査により、調査対象地域の南北に亘る遺跡分布状況は概ね明らかになったといえる。今後はこれまでの調査成果を統合した上で、カラ・バルタ周辺のチュー渓谷西部における遺跡分布の変遷について理解を深め、天山北路を取り巻く文化的動態を総合的に明らかにしていく予定である。

著者らは、JSPS18K12560 若手研究「シルクロード天山北路の形成過程に関する考古学的研究」(代表：山藤正敏)の助成を受けて本研究を実施した。

■参考文献

- ・ Бернштам, А. Н. 1950 *Труды Семипалатинской Археологической Экспедиции Чуйская Долина*. Материалы и Исследования по Археологии СССР No.14. Москва и Ленинград, Издательство Академии Наук СССР.
- ・ Кожемяко, П. Н. 1959 *Раннесредневековые Города и Поселения Чуйской Долины*. Фрунзе, Академия Наук Киргизской ССР.
- ・ 城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・山内和也・B.アマンバエヴァ 2016「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘(2015年秋季)調査」『Waseda Rilas Journal』4号 43-71頁。
- ・ 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所(編)2020『アク・ベシム(スイヤブ)2019』帝京大学文化財研究所。
- ・ 山内和也・B.アマンバエヴァ(編)2016『キルギス共和国チュー河流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡 —2011~2014年度—』独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。
- ・ 山藤正敏・B.アマンバエヴァ 2020「シルクロード天山北路の形成過程—キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査(2018・2019年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』67-70頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 山藤正敏・B.アマンバエヴァ 2021「シルクロード天山北路の形成と展開—キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査(2018・2019年)—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』72-75頁 日本西アジア考古学会。